

満州

悲しみの思い

満州引揚げと再起の北海道開拓

北海道 田中とめ

はじめに

敗戦から五十余年もたった今、満州引揚げの労苦、体験を書き綴ってほしいという話がありました。が、現在の幸せな暮らしの中で思い出したくないというのが、偽りのない心境でした。私よりずっと悲惨な目に遭った多くの方々が、立派な文章や記録を残しておられるので、私など書くことはないと思っておりましたが、弥栄会北海道支部長の小野塚さんの勧めもあり、

地獄のような敗戦の中を生きてきた一人の生き証人として艱難辛苦の体験を語り継ぐことの大切さを感じ、思い切ってペンを執ることにいたしました。

「過去は忘れ去ってしまいたい。あの悲惨な話は我が子にも、ましてや他人には語りたくない」と、貝のように口を閉ざしてきた胸の内を、あまりにも残酷で、無意味な戦争を二度と繰り返さないために、そして異国の地に残してきた我が子の供養のためにも思いながら書き始めました。

一 渡満の動機とその後の状況

私は明治四十四年九月に、長野県下伊那郡市田村吉田（現在の高森町）で、百姓の家の九人の兄弟姉妹の六番目の四女として生まれ、小学校を終えて実家の農業を手伝っておりました。

姉婿の親戚にあたる筒井さんから「満州開拓団の人
のところに行かないか」という話があり、家族一
同は反対でしたが、学校もろくに出ていないし特別な
技能も持たない私でも、百姓仕事なら何とかできるの
ではないかと単純な考えで満州に渡る気持ちになった
のでした。

昭和十一年三月、私がこれから嫁ぐ満州弥栄村開拓
団から、奥さんを迎えに来ておられた同じ下伊那郡出
身の小倉幸男さんに引率されて、私のほかに長野、新
潟、岩手、群馬の各県から十人ほどの花嫁たちが一緒
に満州に渡ったのでした。

新潟の港から乗船し北朝鮮の清津に着き、一泊した
のち列車で哈爾濱に向かい、さらに哈爾濱から松花江
を船で下り佳木斯に着きました。主人になる人が馬車
で迎えに来ており、ここで初めて対面することになっ
たのです。そこから弥栄村長野屯に着き、早速にぎや
かに大陸の花嫁到来とばかりに迎えていただきましたし
た。

長野屯は一組から四組まであり、私の嫁いだ田中岩

太郎は四組でした。主人は動物が好きでな人でしたの
で、長野屯全部の綿羊の世話をしており、私も農作業
を手伝っておりました。

そんな折の昭和十二年春、弥栄種畜場の堀北先生が
見えられて「種畜場にきて一緒に仕事をしてみない
か」と、誘われました。長野屯内のことや自家営農な
どのことを考えた上で、主人に従って私も種畜場に行
って暮らすことになりました。

当時の種畜場は古い建物施設でしたが、既に新種畜
場の建設が始まっておりました。場長は堀北進先生、
それに山形県出身の伊藤忠太さんが大動物係、主人の
田中は小動物係、宮城県出身の菅原安時さんが農耕係
で、そのほかに現地人を雇っていました。新しく完成
した種畜場は三階建てで、一階は小動物、二階は住宅
に充てて、堀北先生、菅原さん、私たちの部屋、訓練
生の部屋、そのほかに一室があり、三階は物置と鶏の
飼育場に使われていました。牛舎は別棟になってお
り、二階に伊藤さんの家族が住んでいました。

訓練生たちは、それぞれ助手として手伝っていまし

たが、この訓練生たちは各開拓団や義勇隊の中から先遣隊員として選抜されて、見習実習のため交代で二、三カ月ずつ絶えず来ておりました。

婦人たちは子育てをしながら、来客のときの接待や綿羊の糸紡ぎなどをして暮らしていました。

部落のほうも、共同経営から個人経営に変わって、それぞれに自分の土地に家を建て始めておりました。

昭和十三年一月には長女が生まれ、私たちもそろそろ部落に戻り農業をするつもりになり、とりあえず私は、子供を連れてひと足先に部落（長野屯四組）に帰りました。それからしばらくして大きな事件が発生しました。

昭和十五年九月のことでしたが、弥栄種畜場が火災で燃えてしまったのです。主人はその時、出張中で不在でしたので、着のみ着のままの姿で焼け出されて無一物になってしまいました。火事の知らせを受けた私は、早速に種畜場へ行きましたが、主人の部屋はきれいに焼けてしまい、大切にしていた書物も半焼けになっていました。ストーブの煙突の不備が原因の出火ら

しく、三階の物置からだったそうです。このような事情から主人も部落に戻るようになりました。

それからの経営は、馬二頭、乳牛一頭、豚二頭、種豚一頭、このほか綿羊などで始まり、徐々に経営を広げました。現地人の五人家族も使用人として雇っておりました。

最初のうちは、搾乳した牛乳は集乳所までが遠かったので、隣近所に配って飲んでもらったものでした。当時、佳木斯医大の学生たちが、同県人というよしみで友達を連れて、栄養補給と言いながらよく訪ねてきたものでした。気候や土地に恵まれて何でもよくとれて豊かに暮らせる、理想的な開拓農村でした。

昭和十七年七月には次女が生まれ、家庭も充実し農業経営も安定してきました。その年の九月には、弥栄開拓十周年記念の開拓祭が行われ、開拓団の成功を祝福しました。

二 終戦前から引揚げ前後の状況

しかしながら昭和十九年に入ると、弥栄村内のあちこちで召集令状がきて入隊する人が増えてきました。

戦争はますます激しいものになっており、心のどこかに不安がありました。

昭和二十年四月に長男が生まれ、それからわずか三カ月後に、とうとう主人にも召集令状が来ました。このときには、弥栄村団員の三十歳から四十歳までの人たちの約七割ぐらいの人が召集されたようでした。また、この頃になると、佳木斯の一般市民を疎開、避難のために弥栄村で受け入れなければならないという話も聞きました。このあとどのぐらいかかる戦争なのか分からないが、とにかく留守をしつかり守らねばならないと覚悟を新たにしておりました。

そんな状況の中で、八月十一日の夜遅くに、「当座の食糧と身の回りの物を持って、明朝、弥栄駅に集まるように」という村公所からの電話連絡が入りました。電話は私の家にあるだけなので、早速、四組の家々を全部回って知らせましたが、四組のどの家も男の人は召集されて不在のため、女、子供だけでどうしたものかと途方に暮れる有様でした。何をどうしたのか判断のつかないままに、以前誰かに教えられてい

た炒り大豆を作り、お米を少し用意し、幼い赤子がいるのでおむつの心配ばかりしておりました。主人のいないこの非常事態に、小さな子供三人を抱えてどうすればよいのか、本当に心細く身辺の整理も手につかず、眠ることもできぬままに不安な一夜を過ごしました。

翌朝暗いうちに使用人の馬車に送られて弥栄駅に着きました。待ちに待った汽車は、夕方になってやっと来ました。それまでは異様と思われる混雑と騒々しさで、頭の中は空白になり放心状態だったように思います。これからどうなるのか、どこに行くのか、何もかも訳の分からないまま、皆の後について行動していたとしか思い出せないのです。この二、三日の間のこととは、まるで悪夢の中をさまよっていたとしか考えやうがありません。

ようやく到着した無蓋車に乗り込み、佳木斯を通過して何日か過ぎて緩化に着きましたが、この間の出来事はまるで記憶がありません。ただただ我が子を必死で守ることしか考えておりませんでした。私はそれまで

母乳が多く出る方でしたので、子供が吸っていけば出ているものとはかり思っておりましたが、緩化に着いて一カ月ほど滞在しているうちに、出なくなっていたのによりやく気が付いたのでした。親切な方がいて乳を飲ませていただきましたが、そのときには子供は衰弱していて飲んでも受け付ける力もなく吐いてしまいい、さらに吸うという力もなく、泣くこともかなわずに、九月二十三日、生まれて百五十日余りの短い命を閉じたのでした。心遣いの足りない愚かな母親のためにかわいそうなことをしたと、五十余年たった今でも心から悔やんでおります。

この緩化の収容所での生活は約一カ月でしたが、何をしていったのか、どんな暮らしをしていたのかもほとんど覚えていません。

日本が戦争に負けたということは、皆さんが口に出して言うようになりやると理解しましたが、住み慣れた弥栄村長野屯に戻れるのかどうかは、頭の中が空白で思いも及びませんでした。とにかくも、その日その日を生きていくことの繰り返しだったことを思い出す

だけです。

やがて、弥栄村で召集された旦那さんたちが、次々と家族を捜し当てて何人も戻って来られたのを知り、主人はいつ戻るのかと心待ちする毎日となりました。

そんなときに、私がちょっと目を離れたときに次女が見えなくなり、復員した男の方たちが、四方八方手を尽くして捜してくださいました。子供を背負ったよそのおばさんを、私と間違えて後を追って行ったらしく、翌日になってようやく見つかり、連れてきてもらいました。体に異常はなく元気でしたが、靴を盗まれて素足で戻ってきました。各地からの避難者が集まっている収容所の混雑の中で、よく捜し出せたものだとほっとし、感謝しました。

九月末ごろになり、緩化を発ち南下することになりました。なるべく日本に近く、冬に向かって少しでも暖かい南の方が良いだろうという、引率する方々の心遣いだと聞きました。緩化を出て間もなく松花江に架かる鉄橋を渡るときに、汽車の窓から亡くなった赤ん坊を水葬にいただきました。この光景はいつまで

も頭の中から消え去ることはありません。

今度の汽車は有蓋貨車でした。走っている間は扉を開けて涼しいけれども、駅に停車すると、ソ連兵や現地の暴民が入り込んできて、現金や貴重品等を奪い取るのです。仕方なく扉を閉じれば、車内は蒸し暑くむせかえる有様でした。

その車中での出来事でした。奉天駅に停車したときに、銃を持ったソ連兵に押し入れられ、ロシア語が話せる弥栄種畜場時代にお世話になった堀北先生が、通訳をして話し合っているうち、何かのトラブルから連行されてしまいました。私たちが大連に向かって出発するまでにとりとう帰ってきませんでした。後になって聞いたところでは、ソ連兵に銃で撃たれて殺されたとのことでした。あんなに畜産のことなどで立派だった方が、戦争に敗れたばかりに無惨な最期を遂げられたことを残念に思います。

十日ほど汽車に乗せられ大連に着いてからは、実業学校に収容されました。教室が宿舎に充てられて、一教室に七、八家族が入ることになり、私たちの室は、

長野屯の人たちが一緒でした。一週間ほどは市内の日系人町内会や婦人会の人たちからの救援食糧の配給があり、久々に満腹感を味わうとともに避難中の張りつめた気持ちも和らぐ思いでした。

そんな生活のときに、次女が熱を出して食欲もなくなり、呼吸も苦しそうになりました。緩化で母親にはぐれたときのことがこたえたのかとも思いましたが、医者に診てもらったところ「はしか」と「ジフテリア」との診断でした。栄養になるものがあるわけもなく、薬も十分に使える目途もない環境で、とうとう元気を取り戻すことなく、大連に着いて一週間ほどたった十月一日に、四歳で亡くなりました。この時、大連在住の長野県と同郷の方で、学校の先生をしておられた宮島正美先生ご夫妻が訪ねてくださって、おかげと布団を持ってきてくださいました。せっかくのおかゆを口にする元気も無くなっていましたが、柔らかな布団の上で息を引きとったことがせめてもの慰めでした。この時も、男の方々の手を借りて実業学校の裏山に運んで埋葬してもらいました。

弥栄村の仲間の人たちの幼い子供が、毎日のように次々と亡くなるのを見て、何の罪もない幼子が哀れに思えて、悲しくも情けない毎日でした。

少し落ち着いたころになって、収容所の弥栄団本部から、それぞれに仕事を見つけて働くようにとの指示が出されました。次女を亡くしたあとと腹膜炎にかかり、妊娠八、九カ月のようなお腹になってしまった私は、どうしたものかと思案の末に、皆さんに相談しましたところ、綏化で召集から帰ってきていた長野屯の塩原さんが、「骨は日本に持ち帰ってやるから、働いて好きな物を食べて死んでゆけ」と言われ、もっともなことだ、体力の続くうちは働こうと覚悟しました。埠頭で、網修理の仕事、洗濯屋の手伝いなど次から次と色々な仕事をしていました。そのうちに、ドイツ人が満人と共同経営をしている肉加工所で働くことになりました。最初のうちは、仕事場にいつもドイツ人の奥さんが、編み物などを持ち込んで見張りをしていました。そして、部屋のあちこちにお金や欲しそうな物が置いてありました。おそらく私を試すためだと思

いましたが、戦争に負けたとはいえ日本人としての自尊心がありましたから、見向きもしませんでした。そのうちにすっかり信用されて、お金を任せられ買い物や支払いをしたり、また、特別に食事に招かれたりして病身の私を大変にかわいがってくれました。体調が悪くて仕事を休んだときでも、困るだらうからと友達に大金を持たせて元気づけてくれたこともありました。私たちが日本に引き揚げる日が近くなったところに、

このドイツ人も本国に帰ることになりましたが、あの混乱の中で、国や人種を越えた温かい思いやりは今もって忘れることができません。女一人、子供を抱えた病身の私が、命をつなぎ日本に帰りつけたのは、このドイツ人の会社で仕事をさせてもらえたことと、温かく助けていただいたおかげだと思ひ感謝しています。間もなくここを辞めて、今度は実業学校の地下室の病人や孤児の人たちの食事を作る所で働きました。この地下室の病室では、弥栄村の人たちで亡くなった人もおりましたし、また、お産をなさった方もおりました。

後になって知ったことには、満州にいた日本人は敗戦とともに避難民として各地に収容されたそうですが、弥栄村の人たちにとって少しでも日本に近く暖かい所として、工藤村長さんや引率の方たちが選んでくれた大連は、日本の人が多く居住していて、避難民を温かく迎え入れて援助してくれたことが大きな励みになったのでした。

哈爾濱や北満の各地で越冬した避難民の人たちは多くの死亡者を数えたそうですが、大連で暖かく越冬した私たちは、おかげさまで無事に過ごすことができて不幸中の幸いでした。それでも弥栄開拓団は、八月十二日に弥栄村を出発するときには総勢約千八百人だった村民が、途中で死亡した犠牲者五百七十人を数え、村民の約三分の一が満州の地に眠っているのです。

私たちが大連にいるころ、主人はソ連に捕虜として連行され生死の境をさまよっていたようです。いつも次女が父親の夢枕に立ったそうで、この子が守ってくれたのではないかと思えるのです。

私よりももっと苦しく、悲しい立場の人がたくさん

いたでしょうに、自分のことだけしか考えられずに、ただ悲しく切ない思いが残っているだけでした。

毎年巡り来る八月六日の広島、八月九日の長崎への原爆投下の日、忘れようにも忘れられない五十数年たった今日ですが、昭和二十一年十二月八日、長崎県佐世保に引揚げ上陸した日も、私たち親子にとっては忘れることのできない日です。

北満の弥栄村を慌ただしく避難してから一年四カ月の逃避行、この間にかわいい我が子を二人も失い、母親としての悲しく苦しい胸の内は、決して忘れることのできない衝撃的なことでした。もちろん私だけだけでなく、同じ立場にあった母親たちが数多くいたことは、満州開拓や満州引揚げという大きな歴史の中で、決して消えることのない悪夢のような現実なのです。

十二月八日、佐世保に上陸し、引揚者収容所に入り、検疫でDDT消毒を受けたりしながら故郷に帰る日待ちました。九州は冬なのに緑の木々や赤い柿の実、みかんの熟したのを見て、日本に帰ったのだという実感が沸いてきました。五、六日して長野組（約三

十家族)は、そろって長野善光寺まで一緒に帰り、善光寺本堂で合同慰霊法要をしていただき解散しました。

私は、主人の実家のある上田市にとりあえず落ち着くことにして、駅まで義兄の出迎えを受けて家に帰り着きました。主人の兄は病気が重い状態でしたので、しばらくして病身の私は、自分の実家の下伊那市田村に帰ることになりました。その後、主人の兄が亡くなり、お参りに上田に行き、しばらく滞在してから、また下伊那に戻るようになっていたところ、ある日の新聞を見て主人が帰ってくるのが分かりました。

昭和二十二年六月、シベリアからの引揚船で舞鶴港に上陸、無事に帰還しました。シベリアから帰った主人は兄、姉の所で仕事を手伝ったりして、しばらくは休養しながら今後の身の振り方を考えておりました。

三 引揚げ後の状況と北海道開拓

主人は、弥栄村当時の長野屯の仲間だった人たちと色々と連絡をとって、これから先の生活を相談していたようでしたが、そんな折、北海道の釧路の近くに既

に入植していた塩原松茂さんから連絡がありました。

ここには、満州弥栄村の生みの親ともいえる中村孝二郎先生が、弥栄村の人たちを引率して集団入植をしておりました。中村先生や塩原さんから、是非弥栄村再建の開拓に参加しないかと誘いの連絡だったので、「何年ぶりの故郷の正月を過ごしてから考えたらどうか、病弱な家族を連れての開拓は無理ではないか」と身内に言われても、もう心は北海道の開拓と決めていたようでした。昔の仲間と一緒に開拓ができるならと、親族の説得には耳も貸さず、十二月になると喜び勇んで北海道標茶町上多和の小玉弥七さん宅に向かったのです。しばらくは小玉さん方でお世話になり、仕事の手伝いをしながら塩原さんに入植する土地の選定や下見をしておりました。

私と長女も半年遅れて、昭和二十三年五月に北海道に渡りました。長野に帰っていた塩原さんに連れられて根室原野の一角に到着しましたが、主人と塩原さんが入植地として選んだこの場所は、満州の弥栄村を思い出すような広々とした所でした。天井のすきまから

夜空が見えるような飯場小屋の仮住まいでしたが、それでも主人のもとによりやく到着したという思いで、あばら家でも苦になりませんでした。

私たちが入植することになったこの地区は、戦前陸軍の軍馬放牧地として使用されていた所で、戦後いち早く開放されて、既に十数戸の開拓者が入植していました。この放牧地内に看守小屋が残されており、主人はこれを当分利用する予定で寝泊まりして、入植準備や家族呼び寄せの計画を考えていました。しかしその矢先に、主人の留守中に火災に遭い、またしても丸裸で焼け出されてしまったのです。そんなわけで急ぎよ飯場暮らしになってしまったのです。開拓者小屋を建てて移り住むまでの五年ほどは、この小屋で辛抱せざるを得ませんでした。

広大なこの地は、満州弥栄村に負けないほどに平坦であり、一部にはうっそうとした林地もありましたが、火山灰地で地力が劣っていることと、春から夏にかけては不順な天候で、昼ごろまで霧がかかり雨降りかと思ふ様な天気、夏になっても日照不足が続くなど

の気象条件は、北満に比べて雲泥の差でした。

当時は、米の配給はほとんどありませんで、馬鈴薯、そば粉、でんぶん等を主食とし、フキ、ワラビ、ウドなどの山菜を補足し空腹を満たしていたものでした。稲作のできない根釧地方で、私たちが食糧にあまり心配しないで生活できるまでには、入植から二十年もたった昭和四十年ごろからだったでしょうか。今振り返ってみればまるでどん底の生活でした。

北海道に来てからも病弱だった私は、開拓初期の無理から脊髄カリエスにかかり、お腹にいっぱい膿がたまり、釧路日赤病院に入院して治療を受けていましたが、半年後には退院させられて、自宅のむしろの上でギブスをはめて寝ている生活に明け暮れていました。こんな暮らしをしているところを、北海道庁の小野さんが見るに見かねて「野一式電気治療器」という器具を勧めてくれました。この器具のおかげでお腹の膿が大量に出て、その後も少しずつ膿をたれ流す生活を十年も続けました。

周りがどんどん木を切り開き、開拓が進む中で私

の北海道での暮らしは、病気との闘いだだったと言っても過言ではありませんでした。年老いるに従い、特に健康には気を配っておりますが、おかげさまで今年九月には入植五十周年を迎えることができました。

昭和四十年ごろ、同じ別海町に、国が開拓を完成させて農家を入植させるパイロットファーム事業や新酪農村事業という開拓制度が進む中で、私たちのように戦後緊急開拓で入植した者は、それはそれは苦勞の連続でした。いつ離農して夜逃げをするのかと言われながらも、主人やその仲間たちは満州時代からの伝統の開拓魂によってこの地に踏みとどまり、五十年の歳月を経て今日の穏やかな、そして健やかな暮らしができるようになったことを心から嬉しく思っております。

私は、明治四十四年九月生まれですから平成十一年で八十八歳になりました。主人は、平成十二年一月で九十歳になります。現在の我が家は、私たち夫婦、息子夫婦、孫夫婦、そして三人のひ孫の四世代九人家族でにぎやかに幸せに暮らしております。四人の孫たちも全員家庭を持ち幸せに暮らしており、皆様から「幸

せ者よ！」と言われますが、自分たちも心からそのように感じて毎日を過ごしております。

五十数年たった今でも、母乳をあげることができなかつた息子のことは悲しいことです。私の下の二人の妹と、主人の妹が満州引揚げを体験し、弟、妹の主人が戦死、姪、甥、合わせて八人の幼い命を失い、その亡骸を満州に残してきたことは悲しい思い出です。

何一つとして得るものは無く、残虐さ、悲惨さだけが残る戦争を、決して繰り返してはいけないというのに、地球のどこかで今も争いが絶えないのは何と愚かしいことではないでしょうか。戦争がいかに無意味なことか、私たちはそれを体験した引揚者として強く訴えると共に、次の世代、二十一世紀に向かって平和の尊さ、大切さがすべてに先んじて守られることを心から願うものです。